

魔女と王様

とつても小さな九つの国——3

あわなみりようさく

57 幸福と後悔と

「熱い！」

突然、ローズンはするどい痛みを首筋に感じ、ルメイアを抱く腕にぎゅうつと力を込めました。ルメイアがびっくりして、母親を見上げます。父親によく似た黒い眼、すつと通った鼻すじに、ローズンゆずりの薔薇色の唇は、将来きつと美しい娘となることを約束するかのようです。

そうです。ローズンのからだの中と外でめちやくちやになつてしまった時間の流れにも関わらず、無事に赤ん坊は生まれ、すくすくと育っていました。

「どうか、したかい？」

ケーリアが甘酸っぱい赤レモンの皮をむきながら、優しい声で言います。

「ほうら、ルメイア、お前さんの大好きな赤レモンだよ」

ケーリアがお皿から一切れつまみ、ルメイアの手につかませます。

——え？

生まれたばかりの赤ん坊が果物を食べるなんておかしいって思ったのでしよう？

そうなのです、ようやくルメイアの成長はふつうの魔女と同じ時間に戻りつつありましたが、これまでは目にもとまらぬ速さで育っていたのです。それはまるで、失われつつある魔女王ザネリの力を受け止めようとしているかのようでした。

柔らかな光と潮の香りの中で、ローズンは東の国で起こった恐ろしい出来事を何も知らず、幸せいっぱいにご過ごしていました。それはもちろん、ケーリアが心をください、ローズンが何も心配せず済むようにと計らっていたからなのですが、ザネリの最期の悲鳴だけは、ローズンのもとに届いてしまった

のですね。熱く、するどい痛みとして……。

エックエックの都に帰りついたニーダマは、すっかりふさぎ込んでいました。五人もの魔女を殺めてしまったのは、やはりまちがいではなかったのか……と。

それと引き換えに何人も兵士たちが犠牲になったのですから、きつとまちがいではなかったはずですが、でも、ニーダマの胸の中にはいつまでも消えない大蛇の涙が、あまりにも大きな哀しみをたたえた黄色い瞳が、ずんと重くいすわっていました。そして、天までも届く真つ赤な炎、デッキデッキの山々を焼き尽くすザネリの憎しみと悲しみの炎が、消えることのない永遠の炎となつて、心の中でいつまでも燃え続けていたのです。

乾いた心を抱えたまま、ニーダマはあれから三度目の狩りに出ていました。いいえ、これは狩りなんかではありません。朝も暗いうちから馬で出かけ、日が暮れてから落ちくぼんだ顔つきで帰ってくるニーダマに、何をしているのかと尋ねる者は誰もいませんでした。家来をだれも連れず、たったひとりで北の森を訪れ、幽鬼のようにさまよっているとときのニーダマには、いつもの堂々とした王様の面影はまるでありませんでした。

周囲に人の姿がないことを何度も何度も確かめ、ニーダマは小さな声で呼びます。

「ローズン——」

そしてまた歩き続け、またローズンの名を呼ぶのです。どんなに必死になつて探しても、ローズンの小屋はどこにも見当たりませんでした。そう、それもそのはずなのです。リングガへ向けてこの地を離れたとき、ケーリアは、ローズンのお屋敷が決して人間の目に触れることのないよう、念入りに魔法をかけて行つたのですから。

はじめはローズンの小屋の場所をはっきり覚えていてと自信に満ちていたニーダマでしたが、今ではそれもすっかり碎かれ、ただ、湖沿いの森の中を、あてどなく彷徨うほかありませんでした。

一度は銀の狐の姿を見かけ、馬がくたびれて走れなくなるまで追いかけました。でも、再び銀の狐に射かけることはできませんでした。それは、ローズンを追い求めるニーダマの心が見せた幻だったのですから。

「はあ……」

そんなニーダマの心のうちを知ってか知らぬか、南リングガリンガの海を見つめ、ケーリアがため息をつきました。

「気が重いけど、そろそろ行かにななるまいね……」

ケーリアには、見えていました。空までを焦げ尽くさんばかりに燃え上がったザネリの最期の炎で、デッキデッキの緑ゆたかな山々が真つ黒な姿となってしまうたことを。そしてもう二度と、あの山々には草木一本生えることもないだろうことを。もしかしたらケーリアは、山々がやがて、黒牙山と呼ばれるようになることすら、わかつていたのかもしれない。

魔女と人間は、敵同士なんかではありません。互いに助けあい、敬いあつてずっと昔から暮らしてきたのです。魔女の絶大な力は弱い人間のためにこそあり、人間の勇氣と愛情は、魔女のように素晴らしい知恵や強い力がないからこそ、備わっているのです。

それは、ケーリアが生まれるずっとずっと前から、魔女と人間のあいだに連綿と生き、引き継がれてきたてきたものなのですから。

それを、たったひとりの愚かな王の振る舞いのために失わせるわけにはいきません。

「人間は、愚かだ。そして、弱い。だけどあたしたちは、人間と一緒にこの世界で生きてきたんだよ」

ケーリアは、まだ言葉のわからないルメイアに向かい、やさしい口調で言いました。ルメイアはただ、にっこりと笑顔を見せて波打ち際へと走り出します。

水平線の向こうに沈みかけた夕陽が波に反射して、美しいだいだい色の光をルメイアの頬に投げかけています。ケーリアは、その美しい光景に目じりを潤ませ、微笑みを浮かべて言います。

「そして、あなたの母さんは、人間の王と恋に落ちた。それは……、ほんとうはね、素晴らしいことなんだよ。ほんとうは、あなたの母さんをあの男から、遠ざけているべきではないかもしれん。でもね、今はだめ。あたしがきつと、あなたたちの運命をこじらせているおかしな縄の絡まりを、ちよつとずつ、解いてやるからね」

ルメイアが、きよとんと首をかしげてケーリアを見つめます。
「だからね、ルメイア。ここで、いい子で待っておいで」

窓際にいたローズンが、波打ち際ではしゃぎ回っているルメイアに手を振ります。ケーリアがため息をついていた姿は、幸せに包まれたローズンには見えませんでした。いいえ、もしも目に映っていたとしても、今のローズンには、それが悲しいため息であることはわからないにちがいません。

「ルメイア、ごはんの用意ができたよ。帰っておいで！ さあ、ケーリアもね！」

この物語はこれでおしまいです。

デッキデッキに残った大蛇ゼウオーラは、燃えゆくザネリの呪いに心をすっかり灼かれてしまいました。それでも、心やさしい魂まで焦がし尽くされてはいませんでした。ただ、愛するものたちを失った悲しみと、行き場のない愛情だけが、ゼウオーラの心にびゅうびゅうと渦巻いていたのです。

ゼウオーラはただ悲しくて、淋しくて、いつまでもいつまでも声を殺して泣き続けたのでした。わずかに生き残った魔女たちもリンガリンガへと逃れてしまい、とうとう誰ひとりいなくなってしまった、真つ黒な山のほとりで。

〈おしまい〉